

△研究ノート▽

埃及研究から見た

近代日本のアジア観

田村愛理

黒船到来という決定的なインパクトを受けて、日本が開国に踏切り、『近代化』への道を歩み出した頃、エジプトはその点、日本よりはるかに先進国であった。

一七九八年のナポレオンの遠征後のエジプトの混乱を收拾し、一九五二年のナセルの革命まで続く王朝の祖となったのは、アラビア語を解しない、アルバニア人傭兵隊長のムハンマド・アリーであった。

一八〇五年から、一八四九年に到る治政中、彼は仏の援助のもと一連の絶対主義改革を行い、徹底した「富国強兵」「殖産興業」「文明開化」政策をとった。

彼の後継者達も大体この線に沿い、エジプトを東洋のベルギーにすべく近代化に力を尽した。一八六九年にはスエズ運河が開通し、祝典の為に作られたオペラ、「アイーダ」のあの勇

ましい凱旋歌は、エジプトの前途を高らかに歌いあげるが如くであった。

しかし、一方、これらの費用をまかなう為、ヨーロッパ諸国から借り入れた外債は、年々雪だるま式にふくれ上がって、ついには借金返済の為の借金という悪循環にエジプト経済は陥入ってしまう。

日本がやつと「近代」国家として歩きはじめたばかりの一八七六年（明9）には、エジプトは国庫を閉鎖し、国家財政はヨーロッパの管理下におかれる事になった。

このヨーロッパ内閣による二重管理体制のもとで、エジプトは国庫歳入の79%をも、債務返済に当てられ、官庁や軍隊においてもエジプト人は昇進をばまれた上、給料は半減され、20カ月分も滞納されるような有様であった。しわ寄せは、農民の上にはなほだしく、飢饉にもかかわらず税金は二年先の分まで暴力的に収奪された。

このような二重管理体制の生み出した矛盾への不満が、「エジプト人の為のエジプト」を唱えた、アフマド・オラービーの革命（ヨーロッパではオラービーの反乱）として爆発点に達したのであった。しかし一八八二年（明15）この革命は挫折に終り、エジプトは、以後イギリスの占領下に入るのである。

私が調べた限りにおいて、日本人がこのオラービー革命を間接的にせよ紹介した、その最初のが、海軍による仕事であったという事実は、後の日本の歩みを考えると象徴的に思われる。これは一八八二年七月十一日の英軍による、アレクサンドリア砲撃の様子を純作戦的・用兵の見地から記録したものを、海軍軍事文庫が訳し、「歴山太利堡壘砲撃顛末」として一八八三年（明16）に出したものである。当時の日本が列強の軍事行動に敏感に反応し、いかに軍の育成、充実に力を入れていたかわれよう。

日本人がオラービー革命に積極的に関わったのは、東海散士においてである。彼は、一八八五年（明18）小説「佳人の奇遇」を発表し、亡国に嘆く、アイルランドの美女紅蓮と共に、エジプトの為に大いになさんとしたのであった。さらに4年後の一八八九年（明22）には、明平滅土・阿梨（ムハンマド・アリ）から亜刺飛（オラービー）までの、エジプトがイギリスの植民地となってゆく歴史を「埃及近世史」として出版した。

東海散士は本名柴四郎といい、会津藩の出身である。会津落城の際には、十七歳だった彼は降伏人として東京の謹慎所に拘束された。（次兄は戦死、祖母、母、妹、嫂は自刃、散士の義はここに由来する。）

明治二年から七年までは各地流浪苦学の日々を過したが、八

年から三年間、横浜税関長、柳谷謙太郎の家に寄食し、英語を学んだ。十年に西南戦争が起ると彼も出征し、戦況報告を「東京日々新聞」にのせたのが縁で谷干城、豊川良平の知遇を得、豊川の紹介で岩崎家留学生として、明治一二年、二十七歳の時永年の夢がかなってアメリカへ渡った。五年後、パチュラー・オブ・フィンランセスの学位を得て帰国すると、折から日本は鹿鳴館時代、政府はうわべだけのヨーロッパ文化模倣に夢中で、「上流者歌舞遊楽之レ耽リ」（佳人の奇遇巻十）という状態であった。

留学中、西洋諸国の東洋侵略が進み、世界が弱肉強食の場となりつつある事実を目撃した散士は、これを憂い、小説「佳人の奇遇」を公けにし、日本の危機を上下に訴えようとしたのである。

明治十八年十二月、伊藤博文を総理大臣とする内閣制度が成立すると、谷干城は農商務大臣となり、散士は彼の秘書官として翌十九年三月から二十年六月までの欧州視察に随行した。この旅行で彼は、革命に失敗し、セイロン島に流刑中のオラービーに会ったのである。又、トルコのオスマン・パシヤ、ハンガリーの革命志士、コッスート等にも会い、東洋の不振を嘆じ合ったという。

伊藤が谷を洋行させた目的は、保守的な谷に欧化の洗礼を与えようと考えたものであったが、谷はこの旅行で、東洋の不振

と西洋の侵略を目の当りにし、逆にナシヨナリズム思想を強めて帰ってきた。七月には、政府の欧化主義政策に憤って辞職し散士も進退を共にした。

散士が、「埃及近世史」を著した意図はその序に明らかである。

「余曾テ其敗將亞刺飛ヲ錫倫島ニ吊ヒ其敗颯ノ由ル所ヲ尋子其志ノ存スル所ヲ叩キ覺エズ涙下ル。遂ニ路ヲ迂シテ所謂新海桜府ニ遊ビ其慘状ヲ目撃シ慨然之ヲ久矣。……」

「嗚呼散士英仏ノ盛事ヲ語ラズ、却テ敗政亡徵ノ埃及ヲ説クモ其志知ルベシ。彼ノ政局ニ当ル者月ニ酔ヒ花ニ狂スルノ余暇此書ヲ繙之ヲ目ニ見ズシテ而心ニ視。……」

不平等条約下にあつて、ひしひしと感じる民族的危機感からエジプトの歴史に無限の教訓を得ようとしたのである。事件に關する記述も詳しく、オラービー等に対し、惜しめない同情と連帶的意識を寄せている。

このような鋭い国際感覚をもつた散士のナシヨナリズムはその後どうなつたか。「佳人の奇遇」はその前半と後半の間に七年のブランクがあつて再開されたものであるが、この両者を比べてみるとおもしろい。前半では自由民権、そして欧化に対するナシヨナリズムがその主張であり、舞台もスペイン、アイランド、ハンガリー、ポーランド等であつたが、日清戦争をはさんで再開された後半はまるきり違つた時事小説となつてい

る。ナシヨナリズムはここで、国権伸長と結びつき、日本が日清戦争を背景に東洋に勃興する物語で、朝鮮が舞台となつてゐる。彼は東亞経営の志を強め、その為のアジアの一致を説くのである。

国権伸長、東亞振興の理想を実現すべく、彼は政界にうつて出る。明治二十八年には朝鮮に日本党内閣をつくる為、陸軍中将三浦梧楼の朝鮮経営の顧問として入韓し、後閔妃殺害事件に連座し、獄につながれたが、無罪となつた。その後も新領土台湾の開発を目的とした台湾協会の委員となつたり活躍し、日露戦争の後、明治三十八年には、国権伸長につくしたその功により勳四等に叙せられ、大正十一年七十一歳で死去している。

散士のこのような経歴をみてみると、そこにナシヨナリズムを軸として、民権と国権が表裏一体をなし絡み合つて進行し、民権から国権への転向が行なわれていった、日本の思想の流れが、その典型としてよくあらわれているように思う。そして、もうこの段階で、日本人のアジア観は分離している。

黒船の威力をもつて開国をせまられた日本が、自らを自覚したのは、まず対西洋という形でであつた。そして植民地化の危機にさらされていた時代には、二つの違つた意識が対アジアにあつた。それは一つには、このようななじみぬアジアから脱し

なくてはいけない、東亞の悪友を振り切つて西洋に学ぶ、すなわち福沢諭吉の脱亜の思想で、これこそ日本を植民地化から救うものだとの意識である。しかし、これは同時にその裏にもう一つのアジア観を持っていた、すなわち、日本を含めてアジアを被抑圧国として捉えており、その意味での弱者の連帯意識があり、この両者はやはり表裏一体をなしていたと考えられる。

ところが、日清、日露両戦役での勝利は、自信へとつながりこの両方を含んだ形で存在した日本人のアジア意識を、やがて西洋に対すべき、東亞を興す、その盟主としての日本という、押しかけ花弁的優越指導者意識へと転化してゆく。

この二面性をもった対アジア観の変化は、その後の埃及研究にも明確にあらわれてくる。初期のものとしては、明治二十六年に書かれた西源四郎の論文「埃及問題」(国家学会雑誌7の77)がある。彼はエジプト問題を朝鮮にからめて説明し、オラービー運動に関してはそれを日本の維新期攘夷軍として捉えてはいるが、同情を寄せ、英仏を批判して次の如く述べている。

「英仏両国が埃及事件ニ就キ施セシ政略ハ往公平ノ措置ヲ失ヒ強ハ弱ヲ侵スノ世慣ニ基ク……中略……一トシテ公明正大ノ処置ニ出シモノナク、特ニ内乱ノ原由タル歐人内政干渉ハ公法上ニ於テ埃及國權ヲ侵セシ者ト云ハザルベカラズ。」そして我身を振り返って、

「治外法權ヲ失フノ國ハ将来何等ノ形勢ヲ惹起スルヤハ埃及問題ヲ以テ龜鑑トナスニ足ル是レガ特ニ東洋問題ヲ講スル者ノ注意ヲ惹ク所ナリ。」と警告を与え、エジプト問題に積極的に、同情的立場にたつて関心を寄せるように述べている。

日清戦争で勝利した日本は、初めて台湾という植民地を統治する事になったが、この頃から「植民政策」関係の本がよく訳され、かつ研究されるようになっていく。明治三十二年戸水寛人はその著「亞非利加之前途」の中で、ヨーロッパ列強の植民政策を示し、日本も白人の奴隸にならぬようにしなければと警告し、その為にはより積極的に植民地を獲得すべしと主張している。この時期の埃及研究は、この線に沿ってなされたものが主である。

鎌田栄吉は、「埃及國の敗政」(東京法学院三十二年度講義録)について、台湾統治の目的の為に述べ、明治三十八年に加藤扶桑は「保護國經營の模範埃及」を韓国經營參考の為に著わしている。同様の本では翌年、竹越与三郎が「比較植民制度」を著わし、英國のエジプト統治法を褒賞している。

そして又、明治四十四年、クローマー卿のエジプト統治の記録を「最近埃及」として訳した大日本文明協会の意図は何であったのか。会長大隅重信は、その序文でこう述べている。

「卿の埃及に於ける經營は我韓國於ける保護政策の上に参考にすべきもの多きを思ひ、之を(クローマー演説集)伊藤公に

送りたることあり——中略——上下二巻偉大なる経世的教訓に充てり。韓国の位置は一変したけれども、我國民が比書に就テ玩味せば、其裨益する所多大なるは余の信じて疑はざる所なり。

——中略——埃及の平和と秩序とは今に至るまで全く英國の兵力によりて支持せられつつあるなり。埃及に於ける英國現今の位置止むを得ざるに於て察するに余りあり。」

と、クローマー卿の統治を激賞し、英國の立場に連帯の同情の感情を惜しまないのである。「無学なる暴徒」オラービーへは一顧の関心も、同情もないようである。まして連帯の感情においておやである。

今や押しもおされぬ、極東の帝国主義國となつた大日本の、大日本文明協會が唱える「東西融合」のこれが本質であつた。

大正期に入つて、注目すべきは十一年に著わされた、大川周明の「復興アジアの諸問題」である。第九章で「埃及における國民運動の勝利」を扱つて彼は、オラービー運動に関して、軍隊が、その國民的利益並に自由の戦士として、革命運動の中心勢力になつた事に注目し、又、クローマー卿のいわゆる恩恵統治に対しては、これを批判し、物質的進歩に拘わらず埃及國民は、常に英吉利に対しての反感を消す事はなかつたと、その國民運動の歴史を述べ、大いに同情を示し、「埃及は既に『恥づべき内なる鎖』を寸断した。彼等は晩かれ早かれ、完全絶對に『痛ましき外なる鎖』をも断つてであらう。」とこれを励ましてい

る。

行動においては積極的な帝国主義者であつた大川周明は、一方においては、ガンジーやネルー、イヴン・サウド、ケマル・パシヤといった民族運動者等の紹介の先駆者であり、イスラム研究にはやくから手をつけ、研究だけでなく、世界最古の回教大学、アズハルへ留学生を送る援助等もした、

大川周明に見られたような、心情と行動の分裂は、しかし次の論文においては、もはや完全に行動面へ一致してしまつてゐる。昭和三年、島谷亮輔は「埃及、印度、支那」(外交時報48加4)と題する論文で「彼等に統治能力ありや」と論じてゐる。彼はまず、アジアのこれらの國の民族運動は日本の勃興に負う處、大であるとし、日露戦争がこれらの民族的自覚を促したのであると自負する。しかし民族運動そのものは西洋文化の移殖であると、これを批判し、民主主義なるものがこれらの國で成功するかと論を進めてゆく。そして結論として、彼等は日本に学ばず徒らに内政を混乱させているとし、

「凡そ統治の最大目的は、国内秩序維持であつて軍隊と警察はその手段であるが、此点においては印度も埃及も絶對的に欠乏してゐる。」そして民族運動の動機は、現在英國人によつて握られてゐる高級官吏の地位を独占せんと欲する不純なものであり、又、それ等の主要は学生である事が多いが、学生が知識の探究という本分を怠つて政治運動に夢になる等という浮薄な

る心懸けでは、とても成功しまい。英帝国が硬化するのも無理からぬ話であり、民族運動に同情する事はできない、と得々と述べている。

ここにおいて、連帯と侵略が常に絡み合つて進展してきた日本人のアジア観は、完全に後者がそのイニシアティブをとり、連帯はもはやゆがんだ形でしか意識の底に存在しない。

昭和六年に始まつた満州事変は、十二年には日華事変へと発展していった。昭和十六年「鉄十字社」で「エジプト侵略の回顧」(独)コンラド・エールリッヒ著、工藤長祝訳」という本が出されている。これは全篇、英国に対する歯に衣着せぬ批判で満ち、大いにオラービー等に同情を寄せているものであるが、その真の意図は社名、及び「ヒトラー総統演説集」「世界新経済秩序の建設と枢軸民族の使命」といった社の刊行物から伺われるように、枢軸民族の使命を喧伝するものであるう。

「エジプトよ何処へゆく、現実なる世界の動きを見つめつつ忍耐と理性と勇氣とを以て最後の一线に踏み止まれ、今や世界の解放を目ざす、新秩序の戦さが勝利の進軍を以て、諸君等の極枯を粉碎しつゝあるのだ！」

そして、この年十二月八日、日本は太平洋戦争へと突入していったのである。